

らに別人の手によると考えられる。(5)は枕詞の「ひさかたの」であろう。(6)は意味不明で、「米」を続けて書いており習書を思わせるものである。(7)はわずかな墨痕のみである。

これらの墨書は全体で何らかの意味をもつとは考えられず、それぞれの部分でも意味が通りにくいので、おそらく手遊びで書かれたものとおもわれる。墨書がある檜扇は平城京・長岡京などで出土例がある。また、出土資料以外の例では、教王護国寺に安置されていた千手観音立像の四二臂のうちの一本の内割りから発見された檜扇がある(江上 綏『扇面画(古代編)』日本の美術三一 一九九二年)。この扇には文字だけでなく、松・草・鶴・鳥などが手遊びに描かれている。檜扇の時期については、先述のように井戸SE五〇二は奈良時代末に廃棄され、その後しばらく時間が経過してから檜扇が投棄されているので、平安時代まで下る可能性がある。

(8)は井戸SE五〇三から出土した。上部と下端部が欠損しているが、形態と墨書の内容から付札と考えられる。「日〇万佐可」は、上部が欠損しているため、この部分だけでは不明であるが、人名の可能性はある。この付札は井戸SE五〇三の掘形から出土しているため、井戸構築時より古いものであることがわかる。共存する遺物から考えて奈良時代末頃のものであろう。

なお、木簡の釈読・解釈については、奈良国立文化財研究所史料調査室の方々のご教示を得た。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成五年度』(一九九四年)

(1~7 久保清子
8・9 久保邦江)

埋蔵文化財写真技術研究会編

『埋文写真研究』第五号

文化財写真の研究、技術、情報など、写真を撮る人だけでなく、写真を使って報告書を作る人、これを読んで情報を得る人まで、文化財調査に関わる人々に必携のマニュアル書。年刊で現在五号まで刊行されている(二号までは品切)。

B5判、一七〇頁、カラー図版多数、

定価三五〇〇円(別冊付録『写真の保管』A4判六〇頁付)

(バックナンバー 三号三〇〇〇円、四号三五〇〇円)

送料四冊まで五〇〇円・五冊以上無料

申込先・〒六三〇奈良市二条町二一九一

奈良国立文化財研究所内

埋蔵文化財写真技術研究会 佃 幹雄 宛

TEL 〇七四二一三四一三九三一

郵便振替 〇一五〇一九九九三〇 埋蔵文化財写真技術研究会